

P23

根未完成乳歯に感染根管処置を施した後、アペキソゲネーシス様治癒経過を示した1例

○馬場篤子、岡 暁子、中村雅子、大木 調、
松尾那実、石井華子、田平和久、柏村晴子、
尾崎正雄

(福岡歯大・成育小児歯)

【緒言】外傷による歯冠破折後、歯髄感染を起こした乳歯に感染根管処置を施行したが、アペキソゲネーシス様の歯根形成を認めた症例を経験したので報告する。尚、患者および保護者の同意は得ている。

【症例】患児：1歳5か月男児 主訴：歯が黒くなっている 現病歴：自宅のテーブルに顔面を強打し下口唇から出血を認めた。1週間後に右上Cの変色に気がつき、かかりつけ歯科医を受診、当科へ紹介来院となった。既往歴：全身的所見に特記事項なし。歯科治療経験なし。口腔内所見：上下顎第一乳臼歯萌出。上顎右側乳犬歯(右上C)には露髄を伴う歯冠破折と暗褐色の変色を認めた。また動揺はM2程度であった。エックス線所見：右上C歯根は、未完成で形成端周囲にエックス線透過像を認めた。臨床診断：外傷性歯冠破折(複雑)に伴う慢性根尖性歯周炎 治療方針：感染根管処置 経過：初診時に右上Cの感染根管処置を開始、水酸化カルシウム製剤を貼薬した。1か月後に歯肉膿瘍を形成したため切開搔把を行い、抗菌薬を処方。2か月後に水酸化カルシウム製剤による根管充填を行った。根管充填から8か月後には病巣の消失と歯根の伸長が観察され、14か月後に歯根完成、21か月後には根管内壁の肥厚化を認めた。

【考察】近年、全部性の歯髄炎・歯周炎に陥った幼若永久歯に対し、Revascularizationによる生理的な歯根伸長を促す治療が報告されている。本症例も同様の生体反応によってアペキソゲネーシス様の治癒が起こったと考えられる。今後、生理的な歯根吸収による永久歯への交換が促されるまで注意深く観察していく予定である。

P24

口臭の原因を口腔外に認めた小児の1例

○伴 祐輔, 稲田絵美*, 窪田直子, 菅 北斗,
村上大輔, 河村良彦*, 辻井利弥,
與倉杏奈*, 山崎要一,

(鹿大・院医歯・小児歯, *鹿大病・小児歯科)

【緒言】小児歯科外来で口臭に関する相談を受けることは少なくない。今回、口臭を主訴に来院し、耳鼻科と連携することを通して改善に至った症例を経験したので報告する。なお、本発表については本人および保護者の同意を得ている。

【症例】6歳女児

【主訴】口がいつも臭く、兄弟にからかわれるのでどうかしてあげたい。

【経過】初診時に医療面接、デンタルX線写真撮影、PCRを測定した。同時にSalivary Multi Test Meter SY-4911 (Lion pro. Oral Healthcare)を用いて唾液検査も行った。検査の結果、う蝕と口腔清掃不良(PCR=81.3%)を認めたため、う蝕治療および口腔清掃指導を開始した。また、唾液検査結果では口臭について問題は認めなかった。う蝕治療が終了し、口腔清掃状態が改善された(PCR=5.0%)時点で、再度唾液検査を行ったが結果に大きな違いはみられなかった。しかし、口臭は全く改善しなかったため、口腔外の原因について検討した。パノラマX線写真で上顎洞にやや不透過性を認め、耳鼻科受診を指示した。診察の結果、鼻腔内に10×10mm程度のビニール片を認め、即日摘出され、口臭は改善した。

【考察】上野らは45%程度の小児に口臭を認めたと報告している。口臭の約90%は口腔由来とされているが、本症例は口腔外に原因があった。口臭は人間関係や本人の精神状態に影響を及ぼすため、小児にとっても軽視すべき問題ではない。実際に患児は兄弟にからかわれている状況があった。本症例は歯科的な対応を図ったが症状は改善せず、鼻疾患を疑ったことで、鼻腔内異物を原因とする口臭の改善につながった。鼻腔内異物は低年齢児に多く、種類も様々である。過去に歯科診療中に異物が発覚した事例も報告されている。小児の抱える問題に隣接領域の原因が疑われる場合は、健全な成長発達を支援するために、医科との積極的な連携を図ることが重要であると認識された。